

福居純『スピノザ『エチカ』の研究
—『エチカ』読解入門』(知泉書館,
2002, xii+554p.)

浮穴 智子

本書は、副題を『エチカ』読解入門と付けてあるが、この副題が与える印象とは裏腹に、難解である。その理由は、本書が哲学史上の重要問題に取り組むことに関わる。

哲学史上の重要問題とは、アリストテレスの流れを汲む、伝統的キリスト教哲学が格闘してきた問題、具体的には、因果系列の無限遡行において、因果律の普遍妥当性に生じる問題である。本書は、スコラ哲学やデカルトとの比較を通じ、この問題へのスピノザの解答を明らかにするのである。

本書の構成は、全五部から成り、各部は『エチカ』の第一部から第五部までの、各部と対応している。各部はスピノザの言葉を丁寧にパラフレーズし、スピノザ固有の諸概念が『エチカ』内部において論理的な必然性をもつことを説明する。他方で、既に触れたように、スピノザ以前の哲学とも比較し、これによりスピノザの独自性を浮彫りにする。

福居が、『エチカ』の諸概念のうち、重点的に論じるのは、「自己原因」の概念である。自己原因は、『エチカ』第一部（「神について」）の冒頭において「その本質が存在を含むもの…」と定義され、スピノザにおいて

は神と同等の存在に相当する。福居は、自己原因の概念が、『エチカ』の第一部から第五部へ至るまで、全体の基底を成し、最も重要な概念であることを明らかにする。

福居は、まず第一部を「神或は自己原因の問題」と銘打ち、自己原因の解明に正面から取り組む。福居は、続く第二部で、自己原因が、スピノザによって人間精神の起源とされていることを説明し、第三部、第四部における感情の議論の説明へと続ける。さらに福居は、第五部において、人間精神が神の認識へ段階的に至るという、スピノザの認識論を説明する際も、自己原因である限りでの神が、根底にあることを示す。

この自己原因を支えるのは、「原因の一義性」という説明原理である。原因の一義性とは、自己原因と作用原因とが、同じ原因性の下で結合する関係を指す。スピノザの作用原因は、神に相当する「実体」が変様し、被造物に相当する「様態」として見られたものであり、様態を原因性の概念である「結果」へと置換えたものである。ところで様態は、自己原因である実体によって産出され、実体無しには存在しない。このことを原因性の下に見れば、結果である作用原因は、自己原因である実体を原因とせずには考えられない。ちょうど、コインの表面が、コインそのものの無しには存在しないのと同様であり、また、これを概念的に見た場合には、コインという同じ概念において、コインの表面の概念に、コインそのものの概念が伴うと考えることと同様であ

る。

原因の一義性とは、自己原因と作用原因を、同じ原因性の下で理解することにより、結合させることである。また、後述のように、原因の一義性は、スピノザ以前における自己原因と作用原因との断絶を埋め、究極的には両者の差異を解消し、両者を区別せず、同じと見なすことを意味する。

原因の一義性は、第一部に関してのみならず、第五部の認識の最終的な段階でも、再び説明原理としての役割を果たす。福居は、原因の一義性の説明を支えとして、『エチカ』が徹頭徹尾、自己原因に裏打ちされた書であることを示すのである。

自己原因についての本書の立場を理解するには、J.-L.マリオンやG.ドゥルーズ、M.ゲルーといった先行研究に対する、福居の応答を理解する必要がある。

第一にマリオンと福居の立場の異同であるが、共通点は、自己原因がスコラ哲学において、アンセルムスからスアレスに至るまで「思惟不可能」とされたのに対し、デカルトにおいて、新たに「思惟可能」とされたという見解である。

他方、相違点は、スピノザの自己原因の位置付けにある。マリオンは、デカルトの自己原因の成果のみを特別視し、スピノザの自己原因については、スコラ哲学の延長上に位置づけ、それ以上の価値を見出さない (J.-M. Beyssade & J.-L. Marion, *Descartes, Objecter et répondre*, PUF, 1994, pp.306-308)。対して福居は、スピノザの自己原因に固有

の価値を見出す。福居によれば、スピノザは、デカルトの成果を受け、デカルトにより思惟可能となった自己原因を、更に独自の概念へと思惟し直した。

この相違点に関して、本書の成果を理解するならば、マリオンよりも福居の方が的確と思われる。スピノザの自己原因は、マリオンの言うような、スコラ哲学と同じ用法を踏襲したものではない。スコラ哲学やデカルトが、神や自己原因を説明する概念装置として、それぞれの仕方で類比を用いたのに対し、スピノザの自己原因は、一義性を用いた点で、独自の概念なのである。

二人の議論の背景には、冒頭で触れた哲学史上の問題である、因果律の普遍妥当性の問題がある。スコラ哲学においては、被造世界の基礎付けのために、因果系列を遡り、原因の探求が行われる。ところで、この因果系列の遡行が無限に続くならば、求める究極の基礎付けは得られない。トマス・アクィナスの解答は、それ自身の原因を持たない、第一原因を神として、系列の最初に置き、系列を完結させることであった。しかし原因をもたないものを置くことは、あらゆる物に原因があるという、因果律の普遍妥当性を、破綻させることを意味する。つまり因果律がはたらく被造世界と、因果律がはたらかない第一原因との間に、断絶が生じる。類比は、この断絶を跳び超える説明原理であるが、これは、因果律に基づく論証ではなく、神の諸性質を被造物の側からの類似に基づき、類推することに他な

らない。類比を用いる限り、断絶は埋められないのである。また、ドゥンス・スコトゥスは、存在に関しては類比ではなく一義性を認めたが、原因は結果に先行するという、スコラ哲学における原因性の制約を脱し得ず、自己原因を立てることはなかった。スコラ哲学において、因果律の普遍妥当性は、破綻したままであった。

デカルトに至って、初めて、原因をもたない第一原因ではなく、自己を原因とする自己原因が因果系列の端緒に立てられた。これにより因果系列の端緒においても因果律が及ぶことになり、因果律の普遍妥当性の問題は表面的には解決される。しかし今度は、自己原因の内実が如何なるものであるか、という問題が残った。デカルトは、自己原因と、被造世界の創造と保存の原因である作用原因とを、「或る意味」で同じとした。つまり自己原因の内実は、因果律によってではなく、作用原因との類比によって説明されたのであり、問題は実質的には解消されなかったのである。

これに対し、スピノザは、因果律に支配された自己原因を立てるとともに、自己原因の内実をも同じ因果律によって説明し、因果律の普遍妥当性の問題に、全面的な解決をもたらした。これを実現するのが、類比と反対の説明原理である「原因の一義性」である。福居の言う、スピノザの「絶対的肯定性」とは、作用原因との関係のみならず、自己原因の内実をも、類比を用いずに、因果律によって説明することを意味する。

スピノザが「一義性」の支持者であったことは、先にドゥルーズが指摘したことである (G. Deleuze, *Spinoza et le problème de l'expression*, Minuit, 1968)。その意味で福居は、ドゥルーズの成果を受け継ぐ。本書がドゥルーズに付け加える点があるとすれば、それはドゥルーズが明らかにした一義性を、原因性の観点から突き詰める点である。

ドゥルーズは、『エチカ』の内部構造における一義性の担い手として、「属性」に光を当てた。属性は、神に相当する実体と、人間を含め被造物に相当する様態との、共通の形式として、両者を「表現」する・される関係において結びつける。属性は実体を表現し、様態は属性を包含する。様態は、実体の本質を表現するところの、属性を通して、実体を表現する。それゆえ様態は、実体から独立に、分離しているのではない。この意味で、実体と様態の間には、一義性の関係が成立する。この点に関して、福居は、ドゥルーズを肯定的に引用する。

さらに福居は「表現」する・される関係を、原因性の観点において詳しく論じる。個々の様態は、自己原因である実体の内に産出されるが、このことを、原因性において見ると、原因と結果とが、共通点である属性を介して結合していることとして理解される。原因にあたるのは、自己原因である実体であり、結果にあたるのは、様態である。このことを、スピノザ以前においても使われ、原因性を表す用語に置きかえれば、自己原因が原因に相当し、無数の様態

から成る作用原因が結果に相当する。

このように原因性へ視点を変換することのメリットは、実体や様態のように、『エチカ』において原因性とは別の意味合いをもつ、それぞれの概念が、原因・結果という観念の結合として、一様に原因性の下で理解されることである。

この原因性への視点の転換が、どうしてなされ得るかといえば、『エチカ』第一部の定理三は、二つの事物が原因・結果であるためには、条件として、両者の間に「共通点」がなければならないと読める。さらに、定理二では、「共通点」は、共通の属性の下で得られると読める。つまり、属性こそが、原因と結果とを結ぶ「共通点」ではないかと考えられるのである。

ところで、福居がドゥルーズとともに強調するのは、スピノザにおいて、自己原因と結合するのは、作用原因の系列を成す個々の項だという点である。「原因」の二文字を名前に含む作用原因は、各項との関係においてのみ原因であり、その場合には系列をなすと見ることができる。自己原因と作用原因との間には、この場合に限り差異がある。しかし作用原因は、自己原因との関係においては原因ではなく、各項が個別に産出される、結果にすぎない。それゆえ、自己原因との一義的な関係が問題となるのは、結果としての個々の項であり、スコラ哲学やデカルトにおいて問題とされたのと同様の、個々の項が連鎖した、系列全体としての作用原因ではない。自己原因と個々

の結果とが一義性をもつことが確実でありさえすれば、無限の項からなる作用原因の系列において、両者の関係を一々確かめる必要は無く、したがって系列全体を完結させる必要も無い。スコラ哲学やデカルトが、作用原因の系列全体を完結させるのは、系列の末端に超越的存在を置き、形而上学的基礎付けを得るためであった。スピノザが、系列を問題としないことは、系列の末端に超越的存在を置かず、因果律の普遍妥当性の問題を解消する証なのである。作用原因の系列を見ないことで、従来の哲学の作用原因は自己原因と全く同じ意味に解される。

福居は、このような原因の一義性を導入した後、副次的とも言える、『エチカ』の諸論点を説明する。その際、引用されるのはゲルーである (M. Gueroult, *Spinoza I - Dieu*, Aubier-Montaigne, 1968)。ゲルーは、実体と様態との関係をはじめ、神の存在と、系列の無限性との関係、及びこの点に関するスコラ哲学やデカルトとの比較、ならびに永遠性、必然性、等々の解釈を提供する。

福居は、ゲルーの解釈をベースとしつつも、福居独自の作業として、諸論点をことごとく原因の一義性に関連づけていく。この作業のゆえに、個々の論点は必要以上に複雑に見える。しかし、これにより『エチカ』の内部構造は、新たに原因の一義性の下に説明し直される。同時に、原因性という一様の視点が、スコラ哲学及びデカルトとスピノザとの比較の立脚点として提示され、簡明で的確な比較が行われるのである。